

● 中 部

伊 藤 美由紀

今年度は、中部の音楽界もコロナ前の状況に戻り、海外の音楽家による演奏会も以前のように開催され、クラシックにも活気が戻った。

毎春開催の名古屋国際音楽祭は、4月に名フィル史上最年少の音楽監督に就任した川瀬賢太郎の初登場、ヴァイオリンの金川真弓、地元出身ピアニストの亀井聖矢を迎えてロシア作曲家プログラムによるガラ・コンサートから始まり、海外からの著名な奏者、オーケストラ、オペラを含めた全5公演を開催。後半、秋開催の名古屋市民芸術祭の音楽部門では、名古屋マンドリン合奏団第64回定期、愛知室内オーケストラ第64回定期、戸谷誠子ピアノリサイタル、鈴木真貴子ピアノリサイタル、トリオストラダ、第24回名古屋混声合唱団演奏会、ニンフェアール第19回公演の県内で活躍する団体/個人による全7公演が選ばれた。

愛知県芸術劇場自主事業からオルガンに焦点を当てた公演は、三浦はつみ/オルガン・レクチャーコンサート(3/24)、THE オルガンNIGHT&DAY(5/2,3)、石丸由佳/オルガンアワー(6/23)、マティアス・マイヤー・ホーファー/オルガン・プレミアム・アワー(9/27)の4点。現代音楽公演では、サウンドパフォーマンス・プラットフォーム特別公演・安野太郎/ゾンビ音楽『大霊廟IV-音楽崩壊』(10/14,15)とニンフェアール第19回公演(11/24)の2点。安野の2015年以來継続しているプロジェクト・ゾンビ音楽は、自動演奏ロボットがリコーダーを演奏し、取材、インタビューからのテキストを使った語り、キックボクシングなど視覚的にも訴えるユニークな公演となった。ニンフェアール公演は、トランペットの曽我部清典、チェロの野村友紀を迎え「リゲティへのオマージュ」をテーマに、伊藤美由紀、後藤成美、水野みか子の3名の名古屋在住作曲家によるリゲティへのオマージュ作品やリゲティの作品による内容で名古屋市民芸術祭に参加し、クリエイティブ企画賞を受賞。アッシャー・フィッシュ・指揮、上田久美子による新演出の全国共同制作オペラ・マスカーニ/歌劇『田舎騎士道』& レオンカヴァッロ/歌劇『道化師』(3/3,5)も特筆すべきであろう。

名古屋フィル定期は、ロベルト・フォレス・ベセスの得意とする北欧プログラムによるシンフォニスト・シリーズ・ニールセン篇(1月)、小泉和裕の音楽監督としての最後の定期(2月)は彼がこよなく愛し得意とするシューマン、チャイコフスキーで盛り上げ、「シンフォニスト」シーズン最後のアーノルド篇は、定期デビューとなる大井剛史によるユニークなプログラムで締められた。川瀬賢太郎が第6代音楽監督に就任し、新シリーズのテーマは「継承」。「川瀬賢太郎音楽監督就任記念」公演(4月)では、川瀬の思い入れのあるハイドン、マーラーを取り上げた。「継承されざる個性」(5月)は、指揮活動引退を公表した井上道義による名フィル定期最後の出演となり、定期初登場の服部百音によるバルトーク/ヴァイオリン協奏曲第2番、円形配置のオケで刺激的な音響の空間移動によるクセナキス/ノモス・ガンマ、同じ配置で照明演出、ソロの立奏で盛り上げたラヴェル/ボレロを含み今シーズン特に印象的な公演となった。「教会音楽の継承と超越」(6月)では、鈴木秀美・指揮でベートーヴェンの大作/ミサ・

ソレムニスに挑み、日本デビューとなるジェフェリー・パターソン指揮、フラメンコギタリスト・カニサレスによる「スペイン・ギター継承」(7月)、名誉音楽監督に就任後初登場となる小泉和裕の「ロシア・ロマンティズムの継承」(9月)、指揮、オーボエにハインツ・ホリガー、ハーブの吉野直子を迎えた「新しい音楽の継承」(10月)、川瀬賢太郎・指揮、ヴァイオリンのコリア・ブラッハー、笙の宮田まゆみによる「死と継承」(11月)、沼尻竜典・指揮、清水和音・ピアノで「ウィーンの伝統の継承」(12月)と続く。市民会館名曲シリーズのテーマは「マイ・フェイヴァリッツ」。カサドシュ(4月)、ソアレス(7月)、下野竜也(11月)の指揮者のお気に入りの曲によるプログラムで開催。特別公演として2006年にスタートした「名フィルの日」は今シーズンで最後となり、楽員によるアンサンブル・コンサートを開催(8/5,6)。川瀬賢太郎の指揮・お話によるこども名曲コンサート〈オーケストラが奏でるとお話し〉(9/23)では、第4代目コンポーザー・イン・レジデンスに就任した小出稚子の委嘱作品も含んだ。なごや子どものための巡回劇場「名フィルがやってきた!」(8/9,10)、障害のある方々、地域の方々へ向けた「夢いっぱいの特等席」福祉コンサート(9/26-28)など特別公演では、初心者、地域に密着した楽しめるプログラムで構成。

セントラル愛知定期の新シーズンのテーマはブラームス。常任指揮者・角田鋼亮によるブラームス1番、ヴァイオリンとチェロの為の二重協奏曲(5月)。ソロは両者共に名古屋出身で、セントラル愛知コンサートマスターの島田真千子、チェロは石川祐支により絶妙な響きを繰り上げた。大友直人・指揮でブラームス2番、ハイドンの主題による変奏曲(6月)、ピアノの小山実稚恵を迎えてピアノ協奏曲1番(7月)、藤岡幸夫・指揮でブラームス3番、大学祝典、悲劇的序曲(9月)、地元出身で国際的に活躍中のピアノの務川慧悟を迎えてピアノ協奏曲2番を含んだ第200回定期(11月)は完売し大成功を取めた。

中部フィル定期では北欧シリーズが始まる。第1弾(5月)は、芸術監督・秋山和慶により、壮大な自然を彷彿させるシベリウス/交響曲第1番、組曲「カレリア」、フルートの上野星矢を迎えてニールセン/フルート協奏曲、第2弾(7月)は、シベリウス3番、ヴァイオリンの北川千紗を迎えてヴァイオリン協奏曲とスヴェンセン/ノルウェー狂詩曲第3番、第3弾(10月)は、シベリウス5番とノルウェーの自然、民族音楽を彷彿させるグリーグ/ノルウェー舞曲、組曲「パール・ギユント」で観客を魅了した。

愛知室内オーケストラでは、新シーズンにヴァイオリンの小森谷巧がソロ・コンサートマスター兼アーティストリック・パートナーに、作曲家の権代敦彦がコンポーザー・イン・レジデンスに就任。古典作品を主体としたA定期、新作や現代作品も含まれるB定期の両定期各10回開催。シーズン初は、B定期からコントラバスに焦点を当て、師弟関係である文屋充徳、幣隆太郎の二人による出演で〜スーパーペダリストシリーズ第3回〜「イタリア」(4月)で、滅多に焦点を当てられることのないコントラバス・ソロによる興味深い公演となった。昨年より開始したオーケストラ・プロジェクトのメンバー作曲家による新曲初演の企画第2弾(B定期10月)は、山下一史・指揮により、笙の中村華子を迎えた作品の森田泰之進、小坂咲子、中村滋延の作曲家3名の新曲とパッハによる個性的なプログラムとなった。

その他、県内作曲家主催による公演では、音楽クラコ座「トカイ・サッキョクカ! #2」(2/23)、「ミッドジャパン音の芸術祭・インターリユード」(5/20,27,28)、「くりもとようこ音の個展IX」(10/20)が開催された。